

第4章 外国語活動

1 新設のポイント

(1) 新設の趣旨

- ① 社会や経済の急速なグローバル化に対応し、学校教育において外国語教育を充実することが重要。
- ② 初歩的な英語（あいさつ、自己紹介など）は、むしろ小学校段階になじむ。
- ③ 現在の英語活動は相当のばらつきがあり、教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続の観点から、共通に指導する内容を示すことが必要。

総合的な学習の時間とは別に高学年において、一定の授業時数（年間35時間、週1コマ相当）を確保する。
（中教審答申 H20. 1）

(2) 目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

三つの柱

① 国語や我が国の文化を含めた**言語や文化**に対する理解を深めることの重要性。その際に知識のみでなく**体験的に理解を深めること**。

② 注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感しながら、**積極的に**自分の思いを伝えようとする態度などを育成すること。

③ 中学校段階の外国語教育を前倒しするのではなく、あくまでも、**体験的に**「聞くこと」「話すこと」を通して、**音声や表現に慣れ親しむこと**。

○上記三つの柱を扱う際には、すべてを「**外国語を通じて**」行うことが明記されている。言語や文化について理解を深めたりすることは、国語などを通じた方法も考えられるが、外国語活動は、「**外国語を通じて**」という特有の方法を明確にした。

○「**コミュニケーション能力の素地**」とは、上記三つの柱である「**言語や文化に対する体験的な理解**」、「**積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度**」、「**外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ**」を指している。これらは、中・高等学校の外国語科で目指すコミュニケーション能力を支えるものであり、中学校への円滑な移行を図る観点から、目標として明示された。

2 指導計画の作成と内容の取扱い

内容の構成

学年ごとに内容を示すのではなく、2学年間を通じて達成される内容を示した。これは各学校が児童の実態に応じて、指導の内容を設定することが適切であり、2学年間を通して柔軟に指導することが適当であると考えたからである。

コミュニケーションに関する事項

- (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。

ここで言う「楽しい」とは、児童自身が使える外国語を駆使して、様々な相手と互いに思いを伝え合い、自分の伝えたいことが相手に伝わった喜びや、相手が言おうとしている内容を理解できたときの喜びを活動等を通して経験させることである。

- (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。

中学校に入学した段階では、4技能を一度に取り扱う点で指導の難しさが指摘されていた。外国語活動では、外国語を初めて学習することを踏まえ、児童に過度の負担をかけないために、「外国語を聞いたり、話したりすること」を主な活動内容に設定することにした。

- (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

児童が豊かな人間関係を築くためには、言語によるコミュニケーション能力を身に付けることが求められる。そこで、外国語活動では、多くの表現を覚えたり、細かい文法事項を理解したりすることよりも、実際に言語を用いてコミュニケーションを図る体験を通して、それらの大切さに気付かせることが重要である。

言語と文化に関する事項

- (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。

外国語活動では、外国語のもつ音声やリズムなどに慣れ親しませることが大切である。実際に英語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して、英語特有のリズムやイントネーションを体験することにより、児童が日本語と英語との音声面等の違いに気付くことができる。

- (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。

外国の文化に限らず、我が国の文化を含めたさまざまな国や地域の生活、習慣、行事などを積極的に取り上げていくことが期待される。外国語活動を通して、多様な文化の存在を知り、日本の文化と異文化との比較により、様々な見方や考え方があることに気付くことで日本の文化についても理解が深まる。

- (3) 異なる文化をもつ人々との交流を体験し、文化等に対する理解を深める。

ネイティブ・スピーカーや地域に住む外国人など、異なる文化をもつ人々との交流を通して、体験的に文化等の理解を深めることが大切となる。

指導計画作成に当たっての配慮事項

(1) 外国語においては、英語を取り扱うことを原則とすること。

(2) 各学校においては、児童や地域の実態に応じて、学年ごとの目標を適切に定め、2学年間を通して外国語活動の目標の実現を図るよう to すること。

(3) 第2の内容のうち、主として言語や文化に関する2の内容の指導については、主としてコミュニケーションに関する1の内容との関連を図るよう to すること。その際、言語や文化については体験的な理解を図ることとし、指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないよう to すること。

(4) 指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるよう to すること。

(5) 指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施に当たっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。

(6) 音声を取り扱う場合には、CD、DVDなどの視聴覚教材を積極的に活用すること。その際、使用する視聴覚教材は、児童、学校及び地域の実態を考慮して適切なものとする to こと。

内容の取扱いに関する
配慮事項

〔コミュニケーションを
体験させる際の具体例〕

コミュニケーションの場面の例

- (ア) 特有の表現がよく使われる場面
- ・あいさつ ・自己紹介 ・買物
 - ・食事 ・道案内 など
- (イ) 児童の身近な暮らしにかかわる場面
- ・家庭での生活 ・学校での学習や活動
 - ・地域の行事 ・子どもの遊び など

コミュニケーションの働きの例

- (ア) 相手との関係を円滑にする
- (イ) 気持ちを伝える
- (ウ) 事実を伝える
- (エ) 考えや意図を伝える
- (オ) 相手の行動を促す

3 Q & A

Q 1 外国語活動を取り入れることによって目指す子ども像は、具体的にはどのようなものですか。

外国語活動を通して目指す子ども像は、学習指導要領の趣旨を踏まえ、各学校の学校教育目標や児童の実態等に照らして考えていく必要があります。「積極的にコミュニケーションを図ろうとする子ども」の育成は、どの学校においても共通の目指す子ども像といえるでしょう。

Q 2 学級担任が中心になって行うということですが、それはどうしてですか。

学級担任は、児童のことをよく理解しているので、児童が初めて出会う外国語への不安を取り除き、新しいものに挑戦する気持ちや失敗を恐れない雰囲気を作り出すことができます。小学校教育や児童への理解は、ALTや外国語活動を専門に担当する教師、また地域人材においても必要なことで、その点、学級担任によるリードが是非必要なのです。

Q 3 英語の発音に自信がないので、担任だけで行う授業に不安があります。すべて英語で行わなければならないのでしょうか。

授業のすべてを英語で行う必要はありません。しかし、教師は子どもたちにとって「英語を使おうとするモデル」といえます。英語での指示やほめ言葉などを、少しずつ増やしていくことは大切です。また、英語ノートの付属CDなどの教材を有効に活用することも、重要な方法の一つです。

Q 4 中学校での学習に備えて、文法指導を行ったり単語の定着を図ったりしなくてもよいですか。

外国語活動は、体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、音声や表現に慣れ親しむことを趣旨として行います。したがって、細かな文法事項を知識として理解させたり、機械的に単語や語句、文を暗記させたりすることなどで、児童のコミュニケーションを図ることへの興味を失わせることのないように留意する必要があります。

Q 5 外国語活動での文字指導は、どのように行えばよいのでしょうか。

英語ノートでも、第6学年でアルファベットを取り扱っています。各校の児童の実態等に応じて取り扱うことは可能です。ただし、過度に正しく書くことをねらった活動や、ペンマンシップなどを活用して何度も書かせる活動は適切とはいえません。小学校では文字にふれる、文字が認識できる程度にとどめるべきでしょう。